

広島と長崎から学べること

がん社会 を診る

中川 恵一

たとえば、原爆によるやけどやケロイドが放射線によるものと思っている人が少なくありません。しかし、これは正しいとは言えません。

私自身をくぐめ、ほとんどの日本人の心に原爆の悲惨さと放射線への恐怖が焼き付いていると思います。ただ、生まれつき、放射線を怖がる人はいないはずで、幼い頃からの教育が偏りがちな見方の背景にあるように思います。原爆によって放出されたエ

ネルギーのおよそ50%は爆風、35%は熱線、5%は初期放射線、10%が残留放射線と見積もられています。

爆心地の温度はセ氏3000度以上にも達しました。初期放射線が始ど届かなくなる爆心地から2kmの地点でも、紙が熱線で燃えだし、木造家屋が全壊する風速60mの爆風にさらされました。原爆による死亡のほとんどが、爆発直後の爆風と熱線によるものだったといえます。

する能力を持っています。

しかし、4千ギシーベルトを全身に一瞬で浴び、治療を受けないと、約半数の人が、骨髄機能を失い、死亡します。ただ、この量の被ばくでも、皮膚の温度は千分の1度程度しか上がりません。やけどと放射線は関係がないのです。なお、白血病に対する骨髄移植の前に、全身に1万2千ギシーベルトを照射することがあります。もちろん、やけどは起こりません。

さて、チェルノブイリや福島での原発事故とちがいが、広島、長崎では、被爆した場所やその後の行動によって、個人の被ばく線量にある程度、推計できます。

戦後の綿密な健康調査と突き合わせることで、100ギシーベルトを超える被ばくで発がんが増えることも、初めて分かりました。

私たち日本人は、広島、長崎の原爆経験から、もっと多くのことを学ぶべきだと思います。(東京大学特任教授)

日本は、男性の3人に2人、女性の2人に1人が、がんに罹患する世界トップクラスの「がん大国」で、世界唯一の戦争被爆国です。しかし、がんについても、放射線についても国民の理解が進んでいないといえませんが、

77年前の8月6日と9日、それぞれ広島と長崎に原子爆弾が投下されました。人類が経験した唯一の核兵器による無差別攻撃です。ただ、原爆についても、多くの日本人が誤解していると思います。



イラスト 中村 久美